

**第505回 2月28日開催
出席委員（50音順・敬称略）**

伊藤 芳明 大村 英昭
木下 明美 倉光 弘己
黒田 勇 櫻井 美幸
森 輝彦
荒巻 裕(書面参加)

◆ テレビ番組「人間・仰木 彬 最後の120日」

1月22日（日）24時30分～25時15分放送

毎日放送の第505回番組審議会は2月28日大阪市北区の本社で開かれ、テレビ番組「人間・仰木 彬 最後の120日」を審議しました。この番組はガンと闘いながら監督を続け、昨年12月になくなったプロ野球界の名将・仰木彬さんの追悼番組。イチロー、野茂らの愛弟子の証言などをもとに仰木さんの野球人生を描いています。

委員の主な意見

*仰木監督の野球人生、指導者としての才能、魅力を、一通り伝えるのには成功しているが、生の激白、内からほとぼしる言葉がほしかった。

*病身で監督を続けるすさまじさ。番組が力まず、へんな突っ込みをせず、自制してあれだけ見せたのは評価できる。みんなの痛みが過ぎたころに、彼の思い、孤独さ、辛さ、弱さを間接的にあぶりだすような番組を作ってほしい。

*巨人のレギュラーから外されていた清原が、2005年の交流試合で、仰木さんと再会するシーンがいい。仰木監督の人間性を引き立てる役として清原を配した構成がよかった。

*ガンを病む人は多いが、ガンを病んでいるトップが、引き際をどうするか、生き方のヒントがあったと思う。仰木さんの顔がいい。笑顔がすごくいい。

* 緊急特番ではなく、1か月たったの番組だから、もう少し踏み込みがほしかった。選手としては必ずしも超一流ではなかった仰木さんが監督になって、人間的にいかにか成長して、選手に心を開かせるようになったかを描いてほしかった。

* 人間の引き際、人間にいかにか死ぬのかというのを、スポーツの監督を通して語られた番組。死とジャーナリズム。いかに死ぬかというのは、団塊の世代がそれを意識する時代であるし、番組作りの大きなテーマになっていくだろう。

* この番組はスポーツを通して仰木さんの生きざまを描き、見る人をして感動を与える。人間は死線をこえて最後の生命力を発揮する。

* 一番印象に残ったのは、仰木さんが選手を育てるのに、現役時代の自慢話は一度もしなかった、「選手一人ひとりの持つ個性をほめて育てた」という姿勢。仰木さんがいかに次の世代を育てるために心を砕いていたかが伝わってくる。画面の中にちゃんと人間が生きている、そして「心に響く」番組だ。